

信の一念について

大平 真理

親鸞は、その主著『教行信証』の「信巻」の末巻の初めに、
信の一念について

夫按「真實信樂」^一、信樂有「一念」^二。一念者、斯顯「信樂開發時
剋之極促」^三、彰「広大難思慶心」^四也。

と、解説している。これは、一念の語を至極短い時間とした解釈であるが、時間のはやさを顯わすものではなく、『一念多念文意』に

一念といふは、信心をうるときのきわまりをあらわすことばなり。^②

とあるように、信樂開發のその時のきわまりを顯わすものである。つまり、『歎異抄』の第一章に

弥陀の誓願不思議にたすけられまひらせて往生をばとぐるなりと信じて、念仏まふさんとおもひたつころのおこるとき、すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり。^③

と説かれているが如く、真實信心は、「如来よりたまはりたる信心」^④であるが故に、たゞ一念という極めて短い時間に円満成就するということを説き、我々の救済は未来でなく、また過去

ではなく、たゞこの現在の一念の外にはないことを明らかにするものである。

罪惡深重・煩惱熾盛の凡夫にとって救済とは、理想的にまた客觀的には「弥陀の誓願不思議にたすけられまひらせて往生をばとぐる」ことにあるのであろうが、『「一念多念文意」に、「即得往生」を解釈して

真實信心をうれば、すなわち无尋光仏の御ころのうちに攝取して、すてたまはざるなり。摂はおさめたまふ、取はむかへるとまふすなり。おさめとりたまふとき、すなわち、とき日おもへだてず、正定聚のくらゐにつきさだまるを、往生をうとはのたまへるなり。^⑤

と言われ、また『末灯抄』にも

如来の誓願を信ずる心のさだまるとまふすは、攝取不捨の利益にあづかるゆへに不退のくらゐにさだまると御ころえさふらふべし。真實信心さだまると申も、金剛の信心のさだまるとまふすも、攝取不捨のゆへにまふすなり。^⑥

と言われているように、現実の心証の上にて求むれば、「攝取不捨の利益」の外にはない。

不思議の本願を信じて念仏申さんとおもいたつ心の起こる時、如来と我々衆生との接觸の一念の攝取不捨の世界が開けるといふことの、その根源には、「たすけんとおぼしめしたちける本願」^⑦があるのである。たすけんとおぼしめしたつ、これが即ち如来の本願の動機を示したものであり、いわゆる信の一念の原理であるならば、念仏申さんとおもいたつころこそ、我々が

うけとるところの信の一念の内容であり、如来の本願にふれるところの信の一念であるといえよう。

その「信の一念」ということを、何故に、卒業論文・修士論文のテーマとして掲げたかというなら、一つには、これまで思かなままに悩み、煩い、考えてきたことが、浅学のまゝに真宗学するにつれて、それが親鸞教学に於ける「信の一念」という問題に集約されるのではないかと思念せられたからであり、と同時に、内に秘めた情熱で仏道の不退という求道に徹せられたその親鸞の生涯を、信の一念の内的覚証を求むることを以て貫かれたものではないかと推察し、親鸞の求道の歷程が信の一念の自開自証そのものの道程であったと思惟することにより、ここに親鸞の「信の一念」の世界を課題として、現代に生きて教えを聞く者自身、内的覚証を求めんと願い、我々人間の人間としての本源への問いとして信の一念というテーマの問題を把握し、根本のところから自己自身へ問題提起せんと念ずるからであつた。

そこで、先ず、如何なる角度から問題を把握するか、即ち如何にして修論を展開したかということについて概観してみたいと思う。

二

信の一念について考察する時、我々は、先ず親鸞の生涯を貫いていた「信の一念」とは如何なるものであつたかを、親鸞自身の教うところに聞かねばならないし、親鸞の求道の歷程が

意味するところは何か、また、親鸞は何処に立っていたのか、つまり親鸞の立脚地を知る必要がある。

親鸞の生涯のその求道の歷程を物語り、その立場を表示し、その教えの中心点を衝くもの、それは

然常没凡愚、流転群生、无上妙果不_レ難_レ成、真実信樂果難_レ獲。何以故、乃由如来加威力_二故、傳因大悲広慧力_一故。⑧と表わされた難信の意義であらう。難解ではあるが、ここにこそ群萌としての存在性格を徹底して内観し、人間としての悲しみの真相に触れ、疑惑深責を表明し、信心為本の上に立たれた親鸞の精神の根底に流れるものを感知せしめられるであらう。それを金子大栄先生は、

如来の加威力には「由る」といひ、大悲広慧力には「因る」といはれたることに意味の別を見てよいと思う。前者に依りてわれらは求めずば与へられざることを知り、後者に依りて与へらるゝものは求めたるものにあらざるを知らしめらるゝ。而して難信の理由は、求めずば与へられざるよりは、与へらるゝものは求めたるものにあらざるところに、一層その深さがあるやうである。しかも与へらるゝものは求めたるものにあらざるところに、信心難獲の限界にある妙果易成が感知せらるゝ。獲信の因由の外に難信の理由がなく、難信の自証の外に、妙果証得の理由はないのである。⑨

と指教して下されているのであるが、いわば「求めずば与へられず、与えられたるものは求めたるものにあらざ」というところの、その如来と衆生の値遇、即ち本願に「遇う」ということ

に於て貰かれた親鸞の姿勢、それが信の一念であるといえよう。道を求め、法を聞くことに於て、現実を悲傷せざるを得ない身であることが知られ、自己を内観反省することに於て、いよいよ救われ難きことを知らしめられ、その傷む心が信に於て生ずる問題を常に新たな心をもって求道し聞法せしめたのであり、離れ難い自己執着の心を傷むことに於て、自力心のもをも捨てない本願との出遇いがあるのである。即ち、ここに親鸞の三願転入の世界があるのである。

この三願転入を、単に、親鸞一個人の宗教的体験の歴史的事実の叙述として領解するのではなく、三願転入表白の前文に於てすら

悲哉、垢鄣凡愚、自_レ從无際_二已来、助正間雜、定散心雜故、出離无_レ其期_一。自度_二流転輪回_一、超_二過微塵劫_一、_レ巨_レ婦_二仏願力_一、_レ巨_レ入_二大信海_一。良可_二傷嗟_一、深可_二悲歎_一。

と、人間の現実に対して永遠に救われ得ざる無底の悲痛を述懐してあること等から、三願転入、或いは『教行信証』というものは、その人間としての深い悲痛と内観というものが、対他的というよりも、むしろ、ひとえに深き内観反省の限界に於けるものとして、如来の廻向と衆生の転入ということを説かしめたのであり、その人間としての深い悲しみの故にこそ、また、現代に生きる我々の問題として躍動してくるのであると領受すべきであらう。

三願転入表白の文の中、特に注意すべきは「然今特出_二方便真門_一転入選択願海_一」^①という、その「今」ということである。

この「今」ということこそ、本願の真実というものに眼を開かしめられた親鸞の親鸞たる所以であり、本願力の不思議をあらわすものは一念の信でなければあらわし得ないと、また、一念ということこそ他力廻向の信心の性格であると説かしめたのである。

このことを明らかに証明するものは、外でもない、第十八願成就の文である。

親鸞は、

諸有衆生、聞_二其名号_一、信心歡喜、乃至一念。至心廻向。願_二生_レ彼国_一、即得_二往生_一、住_二不退転_一、唯除_二五逆誹謗正法_一。という本願成就文を、『無量寿経』巻下の「弥勒付属の文」

仏語_二弥勒_一。其有_レ得_レ聞_二彼仏名号_一、歡喜踊躍乃至一念。当_レ知、此人為_レ得_二大利_一。則是具_二足無上功德_一。

と読み比べ、『無量寿如来会』巻下の成就の文

他方仏国所有衆生、聞_二無量寿如来名号_一乃至能発_二一念淨信_一歡喜_一。

等に立証して、この本願成就の文の一念をもつて信の一念と領解されたのである。

そして、この願成就文を「信巻」の三心一心問答に引用される際は、文章を「乃至一念」で切って二段に分けて、信衆釈では「本願信心の願成就文」とし、欲生釈では「本願の欲生心成就の文」としているのであるが、この両者の中間にある成上起下の「至心廻向」を「至心に廻向したまへり」と読まれた点に親鸞に於ける信の一念のすべてがあるといっても過言ではない。

願成就の「乃至一念」をもって特に信の一念と決定せられ、その信の一念の因によって即得往生の果を成就する所以の淵源を見出されたのは、まことに、この「至心廻向」であった。これを、もし仮に「乃至一念」は「信心歡喜」に続くのでなく、下の「至心廻向」に連続するものとするならば、「乃至一念」は行の一念ということになり、至心廻向も自力の廻向と領解されねばならなくなってくる。しかし、自力ではなく

至心は真実といふことばなり、真実は阿弥陀如来の御ころなり。廻向は、本願の名号をもて十方の衆生にあたへたまふ御のりなり。¹⁵

と書かれているところの如来の廻向でなければ、本願成就の文も、ただ本願が成就したということに終り、本願の廻向成就という真の本願成就の意義が明らかにならない。

それらのことは、「信巻」の願成就文の私釈や『一念多念文意』の願成就文についての解釈や『末灯鈔』・『唯信鈔文意』の撰取不捨の領解等により窺知されるものであるが、また、それらの解釈によって我々は、三願転入に於ける三願の深い緊張関係や、親鸞教学に於ける大行・大信の問題、特に「行の一念」と「信の一念」の関係や、『愚禿鈔』に「信と受本願」前念命終即得往生後念即生¹⁶と説かれたことの深意等を領解する手がかりをつかめるであろう。

ここでは、その詳述は略すが、問題を把握する上に於て興味深く思われることは、「行巻」に於ける「行の一念」、「信巻」に於ける「信の一念」、その両者の展開の仕方が、まったく良

く似ていることである。

「行巻」にては、まず大行そのものの意味内容を説き、以下経釈の文類と共に称名念仏が浄土真実の行であり選択本願の行であることを開顯して、その行実現の直接なる状態として行の一念について釈し、次いで『大経』流通分弥勒付属の文を引証し、さらに弥勒付属の一念を転釈し、そして大行の利益について結釈するのである。つまり、この流れというものは、一声称念に於て大行のあらゆる功德は領解せらるゝことを顯わすものである。

「信巻」に於ては、まず巻頭に真実信の有する意味を広く説きつつ、本巻の中で涅槃の真因はただ信心一つであり、その真実信心というものは、如来の本願力廻向の信心であって体は如来廻向の南無阿弥陀仏であると教説し、末巻に至っては、信の一念を釈して、真実信心は信樂開發の特剋之極促たる一念に現れるを説き、次いで第十八願成就の文や、『如来会』の文を引証し、そして願成就文を転釈し、信心の現生の利益を説いた後、経釈をかえりみて広く一念を転釈し、信の意義と思われるすべてを一念に内観して、一念一心が仏道の正因であることを定めているのである。

この両者の展開のされ方がよく似ているということは、即ち行信二巻相応じて広く行信の意味を開顯すると共に、その直接に衆生の意識に現れる一念の相を説くものであり、罪惡深重・煩惱熾盛の地獄必定の衆生に於ける一念不退の道の無限の感懷を叙述するものである。

この両者の不離の關係については、『末灯鈔』の中の親鸞から覚信への便りによって推知されるであろうが、この行信の一念の問題と共に念頭に置くべきは、親鸞の「信受本願前念命終、即得往生後念即生」という仰せを曾我量深先生が「信に死して願に生きよ」と領受なされたことである。これは、現代に於ける信生活の一つの眼目であろう。

ただ、このような「信の一念」に於ける問題を考察する時、我々は、あくまでも問題を問題として対象化してしまつてはならないのであつて、如何に客観的に論理的に解釈しようとしても領解できる問題ではないということを考へておかねばならない。親鸞に於ける信の一念の論理的構造が如何なるものか、また、それがどのように展開されたかを理知的に知るだけでは、内的覚証の道として親鸞の生涯を貫いた信の一念の世界が明らかにならないし、現に生きている我々の自開自証の道として、より具体的にその宗教的生命が躍動してはこないであろう。真に我々の問題となり、指導原理として生きてくるところには、群萌としての存在性格の本質に関わる人間親鸞の内観反省せざるを得なかった普遍的必然的根拠があったのであると思う。それは、右の一高僧の特異なる敬虔感情や観念的な論理性というものではなく、群生海としての性格の上から真に機受ということに於て明確にされるべき普遍的・必然的な根拠であり、その内的覚証となるべき何ものである。

それが、本願成就の文を読み、本願成就の意味を明らかにし、信の一念というところに立つた親鸞の『教行信証』の一つの課

題であつたのではないだろうか。

もちろん、それは三願転入というような問題と別にあるものではなく、一なるものであろう。が、あえて極論するならば、そこに如来廻向の信ということをもふまえた「一心帰命」ということと、宿業の自覚ということをもふまえた「二種深信」ということに学ばねばならないものを感じるのである。

「一心帰命」ということに於ては特に、天親の『浄土論』より入・出二門を承け、曇鸞の『浄土論註』より往相・還相を承けて、これらを理論的背景として、浄土真宗の教学の大綱を体系づけられた親鸞の他力廻向説というものを念頭において、「信巻」の三心一心問答と一念の意義というものに注意せねばならないであろう。

三心一心問答は、天親の自誓の一心ということについて、第十八願に示された至心・信楽・欲生の三心とを対照させ、往生浄土の正因について、本願には三心といい、天親は一心というこの相違を問答解釈したものであるが、その二つの問いは、まことにそれによりて如来の願心を開顯せんとするものであり、信楽即ち真実信心というものの真意を明らかにし、善導の『観經』三心釈を深化せしめ、『大經』の三信に帰せしめんとする願いがあるのである。

この三一問答の中で特に注意したいことは、三心の結釈に、
信知、至心・信楽・欲生、其言雖異、其意惟一。何以故、三心已疑蓋无^⑩雜。故真実一心、是名「金剛真心」、金剛真心是名「真実信心」。

と説かれていることであり、至心釈に於て

斯至心則是至德尊号為其體也^④

と言われ、信樂釈に於て

以利他回向之至心、為信樂體也^①

と言われ、欲生釈にては

以真實信樂、為欲生體也^②

と言われ、その欲生は

則是如來招喚諸有群生之勅命^③

とあらわされたことである。これにより、三心が信樂一心即ち真實信心におさまるということと、三心の各位置というか、關係は、至徳の尊号を体とするものであり、逆にその用即ちあらわれ出る姿は、本願招喚の勅命であるということが知られる。

つまり、「聞其名号」ということ、弥陀招喚の勅命を聞くことに外ならない。故に、三心即ち信心の体と用の關係を明らかにして、三心の結釈には

真實信心必具名号、名号必不具願力信心也^④

と仰せられたのである。ここに至って、我々には、『教行信証』の総序の

円融至徳嘉号、転悪成徳正智、難信金剛信樂、除疑獲証真理也^⑤

という文や、別序の

夫以、獲得信樂、發起自來選択願心。開闢真心、顯彰從大聖矜哀善巧^⑥

という文が想起されけると同時に、新たに難信と仰せられた

深意を感じずにはいられないものがある。

さらには、「信巻」の末巻にて、願成就の一念をとりあげ、その名号を聞いて信心歓喜する一念に、至心の廻向にあづかり、即得往生の利益を得るということを説く、その「一念」の意義に注意せねばならない。

行信の一念に於ける意味は、先述した如くであるが、「信巻」の末巻に至っては、時剋・慶喜・無疑・无二という一念の意味が説かれ、さらに主として善導と曇鸞の語に依って、経釈をかえりみて広く一念を転釈し、これを「大慈悲心」に帰して、一念一心が仏道の正因であることを定められている。

「一念」の語は、「至心廻向」の語とともに願成就の焦点であって、実に意味多含なものであるが、このように信の意義と思われるすべてを一念に内観せらるることは、一念こそ不退の道のよって立つところであるからである。しかるに、信一念の「時」というもの、それは深遠微妙なる大悲廻向の仏心を、如来廻向の故に成立する信の一念の内容を、豊かに表現するものであるといえよう。

そういう他力廻向の信の、信一念の機受ということに於ける必然性、必然的根拠、それは、我々人間が業縁存在であるというところにあるのである。そのことを『歎異抄』は、特により具体的に我々の現実の問題を通して明らかにしてくれる。

地獄一定の我々には、「たゞ念仏して弥陀にたすけられまひらすべしと、よきひとのおほせをかふりて信するほかに、別の子細^⑦」はない。しかるに、法に遇う喜びは、はかり知れないも

のがある。しかし、この歡喜が如何に心身を満たす大きな喜びであつても、その喜びが烈しいものであればある程、それは時と共に弛緩し、沈靜してゆくものである。そこに、かつての心身を占めた歡喜を想起し、それを再び呼びもどそうとする焦燥が生まれる。だが、「念仏まふしさふらへども、踊躍歡喜のころおろそかに」して、「またいそぎ浄土へまひりたきころのさふらはぬ」という激しい絶望の苦惱の中に、かえて自己への執着を内觀せねばならないものがあることを知る。その内觀反省が求道の初一念にたちかへらしめる。されば、「天におどり地におどるほどによろこぶべきことを、よろこばぬにて、いよ／＼往生は一定とおもひたまふべきなり」云々という心境に達することとなるのである。しかし、何故に我々は歡喜と絶望とをくり返すのであろうか。また、何故に罪惡深重・煩惱熾盛の流転きわもなき我々が、法の遇縁を得るのであろうか。まさしくここに、真宗の宿業觀がある。

我々は、明確なる根拠を持つているのではないけれども、宿業にある種の暗さがあるという概念にとらわれており、宿業という言葉の響きに不可抗的な絶望感を抱くようである。しかし、『數異抄』第十三章の教えから、その宿業の暗さの本質にこそ、本願力廻向の信があるのではないかと思念せられるのである。

如來が我々衆生を招喚されるのも宿業を通してであり、宿業を通して仏と衆生は感應道交するのであり、自己の宿業を知らしめられたそこに本願が開け、如來の本願へ帰入するのである。つまり、これは廻心であり、二種深信であり、罪惡の自覺とい

う問題である。

『愚禿鈔』には

聞「賢者信」

顯「愚禿心」

賢者信

内賢外愚也

愚禿心

内愚外賢也

と、あるいは

不得「外現」賢善精進之相、内懷「虚偽」

等という深き内觀による懺悔の言葉があるが、宗教的自覺ということ、これは決して容易なことではない。

内觀反省すること、また、仏に遇うということは、我々が会おうとして逢うのではなく、仏智不思議・誓願不思議によるものであり、業縁の時機純熟によるものである。

その求道の如何に困難なことであるかは、彼の清沢滿之が、

『我が信念』の中で

私の信念には、私が一切のことに就いて私の自力の無功なることを信ずると云ふ点があります。此の自力の無功なることを信ずるには、私の智慧や思案の有り丈を尽して、其の頭の挙げやうのない様になると云ふことが必要である。

此が甚だ骨の折れた仕事でありました。其の窮極の達せらるゝ前にも、随分、宗教的信念はこんなものである、と云ふ様な決着は時々出来ましたが、其が後から後から打ち壊はされてしまったことが幾度もありました。論理や研究で宗教を建立しやうと思つて居る間は、此の難を免れませぬ。何が善だやら惡だやら、何が真理だやら非真理だやら、何

が幸福だやら不幸だやら、一つも分るものではない。我には何にも分らないとなった処で、一切の事を挙げて、悉く之を如来に信頼すると云ふことになったのが、私の信念の要点であります。

と告白している如くである。満之が言っているように、自力無功となって、最後にはただ仏の招喚を待つより外にはない。我々の人智の壁を超えるところの道、それはまったく如来の招喚の声より外にはないであろう。

そのことを明らかに指教するもの、それが善導の「二河譬」である。

善導の真宗相承に於ける地位は、実に重要な意味をもつものであり、親鸞は多大の精神的影響を受けているのであるが、その「二河譬」は、我々の悲しむべき・痛むべき人生の事実を譬喩として説くものであるが、単なる神話的譬喩ではなく、すべての浄土願生者の生きる苦闘の姿であり、人間の宗教的実存の本質を描くものである。

二河譬によれば、願生心を妨げるものは、貪瞋の水火二河である。しかし、白道を発見せしめたのも水火の二河であり、自己決定も二河から生じたのである。そして、人生の悲痛も、道を求むることも、貪瞋煩惱それ自体である。されば、仏の本願によって与えられ、知らしめられた宿業というところに我々の深い悲しみがある。しかしながら、仏の大慈悲心により、我々には宿業というところに不退の道があるのであり、自由というものがあるのである。

ただ、妄念妄想の自力で自身を決定せしめて救われない身であるという機の深信ならば、我々は絶対に救われることはあり得ないことになるであろう。「無有出離之縁」ということは、出離の因縁有ること無しということであって、出離不可能ということではない。出離の因縁を有しない、つまり自分自身は出離ということにおいて、まったく能力を有しない者であるというところにこそ、無有出離之縁の機という真意がある。即ち、自力無功ということである。自力無功ということは、決して妄念妄想の自力ではなく、如来本願力廻向の道である。仏の本願に照らされて始めて宿業を知らされ、自己の宿業というものからさらに遡って仏の本願を仰ぐのである。

然れば、我々が業縁存在であるということに信の一念の宗教的生命が躍動してくるのだといえよう。

以上のように、問題を展開してみれば、親鸞の信の一念の世界というものと、今生きている我々の道というものの関係、即ち信の一念の内的覚証の道というものと、現生不退の道というもの、一つであることが信知されるであろう。

次に、そのことを明らかにするために、修論の展開過程に於て明らかにしたことについて、少々述べてみたい。

三

「三願転入」・「一心帰命」・「二種深信」という大きな三つの角度から信の一念という問題を考察してみて気付くことは、先ず第一に、我々は信一念に於て、一面いつも念々に煩惱熾盛の

凡夫であること、即ち機の深信をもち、同時に他面念々にいわゆる法の深信をうるのであるということである。換言すれば、我々はなかなか自身を内観して決定深信することは容易なことではない身である故に、信一念の念々現在に於て、南無阿弥陀仏が機法一体として成就するということでなければ、救われる道はないのである。

信の一念の一面は機の深信であり、他面は法の深信であり、その機の深信、法の深信という信の一念を離れて、摂取不捨の利益にあづけしめられるはずはない。さらに、我々が常没流転の無有出離之縁の身であることを内観するならば、その自開自証は無限の道程であると知られよう。そういう自開自証の無限の道程を歩むというところに、群萌の群萌たる所以があるのであるが、それは決して絶望や空過などという暗いものではなく、むしろ無限に展開されていくところに、仏智不思議・誓願不思議という如来の本願の世界が莊嚴され、名号がより具体的に招喚の勅命として我々の上にはたらいてくるのである故に、真の自由があり、生の明るさがあるといえるのであろう。

それは、そこに欲生と廻向という如来のたすけんとおぼしめたちける本願のはたらきがあるからである。

願というものは、信が清淨真実信であるかどうかという根拠になるものである。信が、如来廻向の清淨真実信であるかどうか、信自体の中にはわからないことであって、その信が自力信をいうのか、他力廻向の信であるのかという自覚自証の原理は願にある。欲生我国という本願、つまり如来の招喚の勅命は、

それを信する時、それは如来の本願に外ならず、さればこそ欲生という如来の本願を信すれば、往生はそこに決定するのであると説かれるのである。しかれば、如来の本願も欲生に始めがあり、我々の信心も欲生に始まるのであるといえるだろう。如来選択の本願より発起するところの真実信衆が廻向されるという、そこに欲生ということの開頭があり、その招喚の勅命たる欲生という願心を純真に表現するもの、それが念仏である。

しかるに、「南無阿弥陀仏」は、本願の名号であり、招喚の勅命であり、我々の正業であり、仏道不退の道であり、願生の道そのものであるということの内観すべきである。ところが、ややもすると恭敬としての礼拝ばかりに重きをなすこととなり、必ずしも帰命ということにならないのであり、理智的に学問的に知ることがあっても、真に自己の問題とならないというところに我々の現実の苦悩があるのである。

とかく、信の一念を離れるから自覚はなく、妄念妄想を浮かべても内観反省することなきが故に、身勝手に合理化してしまいがちである。現実生活の心行を通して真実の世界へ帰るということがないから、宗教がある種の麻薬的な役割に終るといふ悲惨な状態を招く。

かくして、人間としての群萌としての存在性格を内観し、業縁存在の故の摂取不捨の一念の世界を、如来の廻向と欲生という招喚の世界を、内観してみれば、三願輸入の表白の「今特に」といわれている「今」ということも、信の一念の自開自証を無限に展開せざるを得ない群萌としての存在である我々に於ては、

常なるものとしての「今」として、我々は内観すべきであらう。

それは、一念ということに「彰」広大難思議心」という彰義を内含されたことと相通するものがある。確に、「現在」としての「一念」、或いは「今」というものは、時の性格を有するものであるが故に、時間の速さや、時量を表わすというようにも考えられなくてはならない。しかし、罪惡深重・煩惱熾盛の無有出離之縁の機としての我々が、聞信一念の即時・即位に摂取不捨の利益にあづけしめられるというときの、その「時」とは、信心決定の時のきわまりとしての「一念」であり、「今」であって、その「時」は、過去から流れ来て未来に向かって流れ去るというような単なる一刹那ではなく、あくまでも「おほきおも、すくなきおも、ひさしきおも、ちかきおも、さきおも、のちおも、みなかねおさむることば」である「乃至」をともなう「乃至一念」として、一切の過去と一切の未来を含んだ、この現在の一念を意味するものでなくてはならない。即ち、単に空間化された「時」としての瞬時ではなく、空間化された時間を超えた、永遠を意味するような、常なるものとしての「一念」であり「今」ということである。

そういう、「今」ということを自覚する主体としての自己とということについて、清沢満之は『絶対他力の大道』の中で

自己とは他なし、絶対無限の妙用に乗託して任運に法爾に、此の現前の境遇に落在せるもの、即ち是なり。

と言っている。その自己とは、「他力をたのみたてまつる悪人」であり、

弥陀の五却思惟の願をよく／＼案ずればひとへに親鸞一人がためなりけり

と言われる、その「一人」であり

独立者は常に生死巖頭に立在すべきなり。殺戮餓死固より

覚悟の事たるべし。

と言われる、その「独立者」であり、常に信の初一念に立つその人である。

「一人」といわれ、「独立者」といわれ、「生死巖頭に立在すべきなり」といわれるところに、道を求むる者の真の主体性があるのではないか。そして、人間の人間としての本源への問いを、真に自己自身の根本のところから問われる問いとして問うということが、実は問わしめられたものであるということにこそ、主体性といわれるものがある。

そういう主体性を持つ存在としての自己に於ては、救われるということとは、我が先か人が先かではなく、我が救われるということとは、人と共に救われるということに於て我が救われるということなのである。

これこそ即ち、管我量深先生が「信に死し 願に生きよ」と指教して下される世界であらう。

されば、常なる「今」としての「三願転入」というもの、それは信の一念の自開自証の無限の道程そのものであり、内的覚証を求むる信の一念の自覚道であるといえるのではないだろうか。そういう信の一念の内的覚証の道というものと、現生不退の道というものは、あくまでも一つである。何故ならば、現生

不退は、現生成仏を意味するのではなく、聞信一念のその時に、煩惱を断ぜずして正定聚不退の分位・分齊を得ると説かれるところのものであって、決してそこに安住し、安心しようというものではない故に、今生きている我々に於ては、真に信の一念の自開自証の道を歩むことが現生不退の道であろうから。

四

かくして、我々には、ただこの現在の撰取不捨の一念の外に救済はない。そして、生涯生死の人間であり、罪惡深重・煩惱熾盛の凡夫故に、聞信して慶喜することと群生海の現実に引き戻されることを絶えずくり返していくのである。それは、普通言われるような一歩前進して転倒し、起き上って一歩前進するというようなものではなく、むしろ、最初の第一歩の為に足を挙げようとして転倒し、起き上ろうとする時に、また転倒し、それをくり返すかの如き悲しき姿である。それは確に、人間の悲しさを如実に示すものであろう。しかし、また、それ故にこそそこに如来廻向の深広の慶びがあるのである。

信の一念の自開自証の無限の道程を歩まねばならないところに、人間としての悲痛がある。しかし、その道を歩むところこそ、自覚というものが深められていくのであり、願生心の内観反省に於て如来の限りなき願心が深く展開されてくるのであり、それがそのまま人と生まれしことの無上の喜びであり、生きている証であり、如来の大悲に深く報謝するものである。

註

- ① 『教行信証』「信卷」末(真全二・七二頁)
- ② 『一念多念文意』(真全二・六〇五頁)
- ③ 『歎異抄』一(真全二・七七三頁)
- ④ 『歎異抄』六(同・七七六頁)
- ⑤ 『一念多念文意』(真全二・六〇四頁)
- ⑥ 『末灯鈔』七(真全二・六六六頁)
- ⑦ 『歎異抄』一九(真全二・七九二頁)
- ⑧ 『教行信証』信卷(真全二・四八頁)
- ⑨ 金子大栄『教行信証講読』二・四〇頁
- ⑩ 『教行信証』化身土卷(本)(真全二・一六五頁)
- ⑪ 同(同・一六六頁)
- ⑫ 『無量寿経』卷下(真全一・二四頁)
- ⑬ 同(同・四六頁)
- ⑭ 『無量寿如来会』卷下(真全一・二〇三頁)
- ⑮ 『一念多念文意』(真全二・六〇四頁)
- ⑯ 『愚禿鈔』卷上(真全二・四六〇頁)
- ⑰ 『末灯鈔』一一(真全二・六七二頁)
- ⑱ 曾我量深選集十二・七四頁
- ⑲ 『教行信証』信卷(真全二・六八頁)
- ⑳ 同(同・六〇頁)
- ㉑ 同(同・六二頁)
- ㉒ 同(同・六五頁)
- ㉓ 同(同)
- ㉔ 同(同・六八頁)
- ㉕ 同総序(同・一頁)
- ㉖ 同別序(同・四七頁)
- ㉗ 『歎異抄』二(真全二・七七四頁)

執筆者住所が掲載されているため
リポジット非公開とする。

- ②⑤ 同九（同・七七八頁）
- ②⑥ 同（同）
- ③⑦ 同（同）
- ③⑧ 『愚禿鈔』（真全二・四五五頁）
- ③⑨ 同（同四六四頁）

- ③⑩ 清沢満之全集六・二三〇頁
- ③⑪ 『一念多念文意』（真全二・六〇四頁）
- ③⑫ 清沢満之全集六・四九頁
- ③⑬ 『歎異抄』十九（真全二・七九二頁）
- ③⑭ 清沢満之全集六・五二頁